

夏季福音特別集会（4）（浅間高原）

愛の知

――コリント前書第13章8～12節――

1957年8月11日

小池辰雄

有機的渾然一体 真理は十字架を通じて入ってくる キリストの真理は同時に愛 無限知・無限生命の世界に入る 現在の終末・天国は近づけり 終末的現実・天国体 絶語・絶慮・絶議の世界 無限知・無限実存のキリスト 光によって光を見る 「よしよし」 神知・靈知・超越知・実存知・愛知 知り定め召し義とし光榮とする 実存することによってのみ福音は知られる 悲願・靈願・本願 愛知一如

【コリント前13】

⁸愛は長久までも絶ゆることなし。然れど預言は廃れ、異言は止み、知識もまた廃らん。⁹それ我らの知るところ全からず、我らの預言も全からず。¹⁰全き者の来らん時は全からぬもの廃らん。¹¹われ童子の時は語ることも童子のごとく、思うことも童子の如く、論ずる事も童子の如くなりしが、人と成りては童子のことを棄てたり。¹²今われらは鏡をもて見るごとく見るところ朧なり。然れど、かの時には顔を對せて相見ん。今わが知るところ全からず、然れど、かの時には我が知られたる如く全く知るべし。¹³げに信仰と希望と愛と此の三つの者は限りなく存らん、而して其のうち最も大なるは愛なり。

●有機的渾然一体

この集会は、始めから終わりまでコリント前書13章をただ集会で学んでいるのではない。私たちの全生活を通して学んでいるのです。

「⁴愛は寛容にして慈悲あり。愛は妬まず、愛は誇らず、⁵非礼を行わず、己の利を求めず、憤らず、人の悪を念わず、⁶不義を喜ばずして、真理の喜ぶところを喜び、⁷凡そ事忍び、おおよそ事信じ、おおよそ事望み、おおよそ事耐うるなり。」（コリント前13・4～7）

皆さん、この三日間の生活で、胸に手をあてて、これに何か反することがないか。もしありましたならば、それは私にみんな負わせてください。私が悪かったです。秩序を乱した人がないか。非礼を行った人がないか。聖別の会に聖別ならざることをした人がないか。みな私に負わせてください。私はキリストに負っていただきます。また、あなた方の本当にしたいと思っていたこと、それを私は満たすことができなかつたでしょう。それも赦し



ていただきます。何さま人は大勢なんです〔註:『曠野の愛』28号に「来会者は約百名」とある〕。いろいろ人間小池がすることは欠陥だらけであります。けれども、この欠陥を通して、皆さんは何を学ぼうとするか。私たちは何を学ぼうとするか。この集會に何を得んとして来たか。キリストの愛のほか何ものでもない。もし、不自由があつたならば、どうかみな私に負わせてください。

私たちはこのコリント前書13章の特に7節において、

「7凡そ事忍び、おおよそ事信じ、おおよそ事望み、おおよそ事耐うるなり」

というこの聖句を腸の奥まで受けとらしめていただきました。この刷り物にも、

「秩序に従いながら、本当にキリストの生命を、自由をいただき、愛をいただいて
いこう。有機的渾然一体となつていこう。」

と書きました。私は決してこの集會が失敗だったとは思いません。神さまは、キリストは私たちを素晴らしく前進させてくださることを信じております。

けれども、神の名鏡の前にはいろいろなものが映る。私たち一人びとりの罪が映る。しかし、その映った罪をキリストはすべて消してくださる。再び新たに十字架を仰ぎ、そしてこの集會を始めます。

●真理は十字架を通つて入ってくる

「8愛は長久までも絶ゆることなし。然れど預言は廃れ、異言は止み、知識もまた廃らん。9それ我らの知るところ全からず、我らの預言も全からず。10全き者の来らん時は全からぬもの廃らん。11われ童子の時は語ることも童子のごとく、思うことも童子の如く、論ずる事も童子の如くなりしが、人と成りては童子のことを棄てたり。12今われらは鏡をもて見るごとく見るところ臙なり。然れど、かの時には顔を對せて相見ん。今わが知るところ全からず、然れど、かの時には我が知られたる如く全く知るべし。」(コリント前13・8～12)

この午前はこのままで。午後は最後のただ一句であります。

「愛は長久までも絶ゆることなし」

愛は永遠である。素晴らしい言葉ですね。皆さん、楽な姿勢で、融けた心で聞いてください。真理を学ぶときは、心の中にこだわりがあつてはダメです。幼児の如く。私も幼児の如くこれから学ぶのであります。

「愛は長久までも絶ゆることなし」。その理由はいずこにあるか。すぐ前に書いてある。

「真理の喜ぶところを喜ぶ」

は、「真理と喜びを共にする」という字であると申しました。なぜ、愛は絶えることがないか。真理と一つであるからである。愛にもたくさん種類があります。けれども、真理と一体に



なっているところの愛でなければ永遠でない。どんなに人間的に愛しましても、いかに熱っぽい愛でありましても冷めます。力みましても動きます。けれども、この愛が永遠であるということの意味は、その筋金はいずこにあるか。愛は真理と共になっている。真理の一つである。この真理の一つであるところの愛のみが永遠である。

この文化の世界にはいろいろな文学、思想において愛の現象が、また実社会において、言われ語られ映画に映され行われています。けれども、

「愛は永遠までも絶えることなし」

というこの愛は、これは真理と一つの愛でなければ。

真理とは何ぞや。これはキリストとトマスとの対話の中にもあるように、

「我は道なり、真理なり、生命なり」

「私が真理である」と。真理は観念ではありません。真理はまことに主イエス・キリストが真理です。真理は説明できない。

「真理は何ぞや」

と言ったらば、

「福音書に入りなさい」

と、私は一言そう言うだけです。ただ福音書に入って、生活をもつてこれを読み、これにぶつかって、説明することのできない真理——これは私たちの一生の課題です——真理の一つになるということは、同時に愛を、私たちが永遠の愛を生きるということになる。

キリストという驚くべき神の現象体、神の生ける徴、言い逆らいを受くるところの徴、これが真理である。この真理は何びとによっても受けとることができなかった。だから、この真理は十字架にかかったのです。十字架にかかった真理がはじめて私たちに化体することができた。真理が十字架にかかったらば、真理は私たちに与えられてきたのです。キリストというこの真理は、十字架を通らなければ、十字架というものを中心としなければ、十字架を道としなければ、私たちに入ってくることでできない真理である。

聖にして聖にして聖なる真理。今、皆さんが讃美歌を歌われたごとく、この聖にして聖なるところの真理は、しかし、人を審かんとしている聖ではない。深く降って人を聖とせんとするところの——キリスト者は聖徒といえます——聖徒とするところの真理である。「聖別」というようなことを軽々しく言えない。私たちを本当に聖徒とするというこの真理は、私たちは何によって聖徒とされたのであるか。私たちは罪びとである。罪びとでありながら、何によって私たちは聖徒として別たれたのであるか。ただキリストの十字架によってです。十字架によってキリストという真理が私たちの中に深く入ってきました。

「何も恐れることもない、何も心配はない。私は道を開いた。さあ来なさい」

と。これはルカ伝15章のお父さんのように、私たちを十字架を通して、十字架という道を通して、キリストは私たちを迎え入れてくださる。私たちは既に真理の中に入っているの



です。私たちは既に、

「汝らは真理なり。既に汝らは真理のものなり。それゆえにいよいよ真理を受けとつて生きよ」

と。真理のものとなっていないものは、受けとつていくことができない。では、

「成っていないものは、どうして成るんですか？」

と。「どうして成るか」ではない。キリストが十字架をもつて成らしめて、その中に既に私たちを置いてくださっている。置いてくださっていることに

「気がつくか、気がつかないか。受けとるか、受けとらないか」

ここだけです。

●キリストの真理は同時に愛

そのようにして私たちはこのキリストの真理の中で受けとつた。ああ、驚くべきキリストの真理は同時に愛であつたということです。だから、

「愛はいつまでも絶えることなし」

とは、

「真理はいつまでも絶えることなし」

と全く一つである。そしてこのキリストの真理というものがいかに深い温かい愛の真理であるか。このような真理は天上天下、古今東西いずこにおいても無いという真理であります。

福音書に来てください。福音書は聖書のアルファにしてオメガ、始めにして終わりであります。一切はこの福音書に向かつて、光がグーッと集中して焦点している。旧約の創世記から新約の黙示録に至るまで。そういう驚くべきこの真理。それが私たちをどん底からゆるし、どん底からいだき、そして生命を与え、光のものとなすという、この驚くべき真理を、こんな素晴らしいものを誰も受けそこなってしまった。キリストは、とうとう仕方がないから、十字架にかかった。

「聖書を繙き得るものがあるか、真理を解き得るものがあるか」

といって、黙示録のヨハネが苦しくて泣いていました。黙示録5章、

「我また御座に坐し給う者の右の手に、巻物のあるを見たり、その裏表に文字あり、七つの印をもて封ぜらる。また大声に『巻物を開きてその封印を解くに相応しき者は誰ぞ』と呼ばる強き御使を見たり。然るに天にも地にも、地の下にも、巻物を開きて之を見得る者なかりき。」

真理の巻物を見る者がないと。

4 巻物を開き、これを見るに相応しき者の見えざりしに因りて、我いたく泣きいたりしに、⁵長老の一人われに言う『泣くな、視よ、ユダの族の獅子・⁶我ダビデの萌蘖、すでに勝を得て巻物とその七つの封印とを開き得るなり』我



また御座および四つの活物と長老たちとの間に、屠られたるが如き羔羊の立てるを見たり、」(黙示録5・1～6)

十字架のキリストの立てるを見たりと。このキリストが真理を、この七つの封印を解いて私たちに今、読ませてくださったつているのであります。

そのような真理であるからこそ、この真理の権化であり、即ち愛の権化であるところのキリストからくるところの愛なるがゆえに、

8 愛は長久までも絶ゆることなし。然れど預言は廃れ、異言は止み、知識もまた廃らん。

預言、異言、知識、これは既に13章の始めの方に出てきました。

2 仮令われ預言する能力あり、又すべての奥義と凡ての知識とに達し
というところがある。それからその前に、

1 たとえ我もろもろの国人の言および御使の言を語るとも、

即ち、この始めの方を受けている。預言も異言も知識も、「プロフェタイアイ」も「グローサイ」も「グノーシス」もみな廃れるという。「廃れる」という語は「カタルゲーオ」という語であります。「効力を失う」という言葉です。妥当性がなくなってしまう、無力になってしまうという字です。もう効果、妥当性、機能性を失ってしまうのであります。預言は預言の必要なときまで、異言もまた異言の必要なおりにおいて、知識もまた知識の、グノーシスもまたグノーシスの働きの必要なときまで。これらのものはみなお役済みになってしまう。無効無機能となってしまう。しかしながら、預言、異言、知識というものの大切さは昨日も申し上げました。けれども、それはある時までである。驚くべき賜物をいただいているパウロは、忌憚なくそう述べております。

●無限知・無限生命の世界に入る

9 それ我らの知るところ全からず、我らの預言も全からず。

「全からず」という表現は「エック・メルース」といって、「部分的」という言葉です。

「我らの知るところは部分的であり、我らの預言もまた部分的である」

これはもともと量的な意味における部分というような気持の字であるけれども、質的にいえば、正にこの「全からず」で不完全である。質的にいって「全く」ない。量的にいつて部分である。どっちの気持もふくめてよろしい。

10 全き者の来らん時は全からぬもの廃らん。

この「全き者」は「ト・トレイオン」という字で、これは正に「完全」という意味です。

「父の全きが如く汝らも全かれ」

という、あの「全かれ」と同じ字です。この「全き者」は分からん。学者がいろいろ説をなしまして分からんです、「全き者」とは何だと。こういう言葉は、パウロが書いている



ときに、あるひとつの概念をただ思っているのでは私はなかうと思う。「全き者」とパウロが言うときに、そこにはある幾つかの相が渾然として一つに表現されている。この場合、その預言、異言、知識といったものが廃れると言いました。そして特にそれを、

「知るところ全からず、預言も全からず」

と言った。知が全き知となり、預言が、言が全き言となる。「廃る」というのは、

「もう廃るようなものだからどうでもいい」

ということではない。

「私たちは中学生だ」

といって威張るわけにいかない。小学校というグルントが、土台がなかったならば、中学校というところに入れない。段階があります。そのように段階を踏みまた踏んでいくのです。そしてその小学校のグルントは、基はみんな消化されて、そして中学校で教わるころの知識が消化され受けとられていく。小学校がなくていきなり中学校に行く、これはダメです。

「小学校の知識は全くはないから一生懸命で真つ先に全きところに行きましょう」

なんて、どっこいそうはいかない。全きところには来れない。数学なんか殊にそういった学問ですね。ちゃんと始めからいけないで、いきなり高等数学に行つて、誰が分かるか。みな順序を踏んでまいります。その段階がある。

ヒルティが『人生の諸段階』という本で言っています。

「幼児の時、少年時代、青年時代、そして成人時代また老年時代と、人生にはいろいろなそのジェネレーションがある。そして、それがその時期その時期において本当にその人の人格の中に浸透していなければならぬ。その人格の中にちゃんと結晶していかなければならぬものがそれぞれある。それを本当に踏んでいかなければ、何か晩年において欠陥のある人になる」

と。全きというなら、そのようにして各時期においてその受けとるべきものを受けとっていく。そして、それがこの「全き」になる。

けれども、受けそこなうことがいくらでもあります。いろいろな生まれつきや環境や、いろいろな事でもつて、これが×になったり△になったり、いろいろな事になります。そういったような欠陥を、幸いなことに福音の世界に入つてくると、それらの欠陥がいわゆる途上の欠陥であつても、質的にはこれらのものを受けとっていくことができる。

福音の世界に入りますと、これは無私無心の、いわゆる私心のないところの無心無私の境地でありますから。己というものが外^{はず}されたんでしょ。私たちは己^{おのれ}があります。けれども、根源は己でない。

「キリストわがうちにあり」

という。

「われもはや生くるにあらず、キリストわがうちにありて生くるなり」



と。パウロが、

「われ一切の秘訣を得たり」

と言ったのは即ち、人生万般いろいろな事において、また知識において、一切の秘訣を得たりというのはこの無限知が、無限知であるところの即ち真理です。これがこの中に入つて来ますから、幼年時代、少年時代、青年時代の自分に何か欠陥があるならば、それをちゃんとあとから永遠の相からして、時間的なそれをちゃんと満たしていく。質的にはこれを満たしていくことができるんです。小さい人と交わっては、本当に童心に成れる。青年と交わっては青年の心を持てる、というような自由な魂には、どうしてなれるか。それはある相対的な次元にいたのではダメなので、この無限知の世界、無限生命の世界に入るというと、これが出来てくる。

●終末

預言、異言、知識は廃れるけれども――廃れるというのはもう効力を失う、用済みである、お役済みでありますから――その先のもつと素晴らしいところに入っていく。それが消化されて行きます。過去はただ忘却ではない。過去は私たちの中に満ちている。それが本当に素晴らしい意味で、濾過されていくんです。過去にいろんな汚いものがあっても、キリストのこの福音にぶつかると、みんなこれは濾過されて、過去は本当に生かされる。

「おおよそキリスト・神にありて信する者にはすべてのことがはたらきて善となるを我らは知る」

とパウロは言いました。ローマ書8章28節、

「²⁸神を愛する者、すなわち御旨によりて召されたる者の為には、凡てのこと相働きて益となるを我らは知る。」(ロマ8・28)

神を愛する者、すなわち神の愛の御旨によりて召されたる者の為には、凡てのことに相働きて――この「相働きて」というのは、神が共に働くんですよ――凡てのことに神さまが共に働いてくださって、善となっていくことを我らは知る。すべてのことが善となっていくのは、そこに神が共にミットヴィルケン「mitwirken」するから、共に働いてくださるから善となる。ですから、私たちにはその無限知がそこに働いてくださるから――無限知というのはここでは無限実存といったつていい――それが働いてくださるから、それが質的に補われていく。

¹⁰全き者の来^{きた}らん時は全からぬもの廃らん。

「ト・テレイオン」「全き者」は言い換えれば、キリストの真理です。キリストという真理が来たときには、今までの不完全また部分的なものは、量的質的に及ばないところのものは、廃つていく。

「その時に」は、古いギリシア語のテキストには「トテ」という、



「やって来ましたら、そのときには」

という字が特に書いてあるが、新しいネストレ「ネストレ・アーランド (Nestle-Aland)」、現代のギリシア語新約聖書テキスト」にはその「トテ」がないけれども、その「全き者が来る」というのはもちろん終末的な角度です。この「終末的」という言葉はちよつと難しいかもしれませんが、これは『聖霊の翼の陰に』(のちに『聖意体现——主の祈り——』(1959年、曠野の愛社)に改題)という本の後の方に私は「終末」(註1)の意味を書いておきましたから、お持ちの方は引っくり返って読んでみてください。

今日のところは、どうしたって、この終末のことを言わなくてならない。「その時には」というのが後から出てくる。

¹²今われらは鏡をもて見るごとく見るところおぼろなり。然れど、かの時には顔をあわ対せて相見ん。

「かの時には」は「トテ」という字です。

「汝ら、天国は近づきたり。神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」

これはキリストの伝道の第一言です。キリストの伝道の第一言は実は全福音であります。

「天国は近づきたり、悔い改めて福音を受けとれ」

このキリストの第一言が本当に受けとれたら、聖書は読めてしまうんです。どうしてこうみんな学者は難しくするでしょうね。キリストは空手形は出さない。必ずキリストの言は実力の裏付けをもっておられる。

「天国は近づきたり」

とは、キリストという天国がやって来た。彼自身が即ち天国の中心体ではないですか。彼自身が天国の中心体で、これがいらつしやいましたので、

「さあ、天国は近づきたり。私が来たではないか。ここに天国を見よ」

と。

「この人を見よ」

という言葉がありますが、あの「まぶねの中に」という、いい讃美歌がありますね。あの「この人を見よ」なんです。この天国というものを引っさげてやって来たところのこのキリストを見よと。このキリストは、

「天国は近づきたり」

と仰ったのは、事実彼は身をもってその言葉を身証しておられるから。キリストは来られたから、天国はやって来た。

●現在の終末・天国は近づけり

「悔改め」というのは

「方向転換」



です。自分を見ていることではなかった。よそを見ていることではなかった。ただひたむきにキリストを見ることを悔改めという。

「悔いて改める」

というと、

「何か悪いことをしました、考えました、それを悔いて改める」

という、そういった枝葉の悔改めもあるでしょう。けれども、根源的な悔改めというのはこのキリストに向かうこと。「メタノイア」というのは「方向転換」、そちらの方に向けるという字です。

目を太陽に向けるのは向日葵^{ひまわり}です。ひまわりは常に悔改めている。ひまわりは常に方向転換また転換。太陽が動くにつれてずーつとそつちを見ている。ひまわりを見て、

「汝何を見るや」

「我は悔改めを見る」

と。そういうわけですよ。我は悔改めを見る。ひまわりはしよつちゆうキリスト〔太陽〕の方を見ているから、これは方向転換また転換している。

「罪」とは何ぞや。

「そつぽを向いている」

ことが罪です。神さまを見ていない、キリストを見ていないということは、魂がそつちに向いていない。即ちキリストとの、神との関係が垂直線に立っていないということが罪ということなのです。

かつて戸外で集会をしました。詩篇33篇だったかな。私は野原に立っていた。ええ、私たちは立っていますねと。立っているこの姿はどういうのですか。垂直であります。ピサの斜塔みたいに傾いていない。垂直である。

「人間」「アントローポス」

というギリシア語は「上を仰ぐ者」という意味で、上を見る者、神を指^さす者。即ち、私たちの身体そのものが指なんです。神を指しているところの指である。

預言者ヨハネはキリストを指した指であった。その如く私たちは神を指し、キリストを指している指である。即ち、私たちは神さまとの関係がそのように真っ直ぐに立っていないければ――これは魂がですよ、身体ばかり立っていたってダメです――魂が立たなければ。あなた方は私の話を聞くとときに、寝ていていい、疲れたらよつかかっても寝てもいい。しかしながら、魂は垂直に立っていてくださいよ。

それが即ち「義」ということ。罪とは、そうでない在り方を「罪」という。いろいろな罪、咎^{とが}といって私たちが具体的に顧みるのは、まだその枝葉であるにすぎない。キリストは、

「天国は近づけり。悔改めて、方向転換して、この福音を受けよ」

と言われた。福音は即ちイエス・キリストが福音であります。



「この私を受けなさい」

と。だから、あなた方は福音書の中に入って、そこにサマリヤの女がいたら、自分がサマリヤの女になって、その劇中の人物となってキリストにつかまえられることですよ、みんなその劇中に入らなければ。

福音書の現実天国がさし迫っているところの、いや実に天国がそこに来ているところの現実だった。天国が、終末に来ている現実。現在の終末だったんです。キリストがそこに来ていた時には、これは現在の終末。終末はこの現在に来ている。そこに現在している。イエス・キリストは、天国はどこにありますか、神の国は。

「神の国は汝らのうちにあり。どこを見ているかね。汝らのうちにあるじゃないか。お前たちの胸三寸の中に天国があるじゃないか。また、お前たちがこのように集まっているその集会の中にあるじゃないか。一、二人わが名によりて集まるところに我はあるなり」

と。キリストの名によつて集まっているときはキリストの**実**が来ている。そしてそこに即ち天国が現れている。

私たちクリスチャンというものは常に現在の終末の中にあるんです。

「聖国を来らせたまえ」

という祈りは、

「この現在の終末を、今現に私たちのこの中に来らせてください」

というのが、この「聖国を来らせたまえ」という言葉の悲願の第一義であります。この第一義が立たなかったならば、いくら何か未来的に「聖国を来らせたまえ」なんてロマンチックに祈ったって、そんな祈りはどこかへ消えてしまう。

●終末的現実・天国体

神さまの世界は驚くべき終末的現実の世界。そこに永遠が質的にこもっている世界。私たちは永遠をつかんでいるのであります。だから、本日一生である。本日は一生である。今日一日を真にキリストと共に生きるならば、その魂、その人は絶対に死なないのであります。そのような、

「聖国を来らせたまえ。神さま、今日一日、私たちの中に聖国を来らせてください」

と。その祈りをして「実存」(註2)していれば、その回りの人たちにその祈りをもつて実存していれば、その人を通して天国体が現じていく。砂漠はサフランの如く花咲いていく。一つのサフランの花が咲けば、すぐさまそれに魂を合わせて、心を合わせて開きます。こないだ『曠野の愛』にその歌を私は書きました「曠野べにほほ笑みめしサフランの**栄光**に映えて千草咲くらん」。

これが、



「聖国を来らせたまえ」

の第一義です。そうしたらば、

「本当に神さま、あなたの聖国を来らせたまえ」

ということの意味がズレなくくるんです。本当にその中に一人でも神を無みしている人があるか。苦しんでいる人があるか。悩んでいる人があるか。

「どうか、その中に聖国を来らせてください」

という祈りは、これは歴史的終末において、「神さま、聖国を来らせたまえ」という祈りとちつとも矛盾していない。矛盾しないどころじゃない。本当にキリストが主の祈りとして

「聖国を来らせたまえ」

との祈りは、この終末的現実を祈っている祈りにおいてピッタリと一つになる。私は、始めそれをなかなか受けとれなかったが、ある時それを受けとって、

「ああ、この祈りは本当に今度は受けとれた」

ということになった。

それが、この終末的現実において、キリストは終末的現実を現じつつ、また使徒たちもまた終末的現実を現じつつ、また真にイエス・キリストが再臨したもうところの、再び来たりたもうところの現実を、彼らは真に目の前にも待ち望んでいたのです。

二千年たつてもその現実、その終末は来ない。けれども、それはいよいよ質的に驚くべき迫りをもって来ている。それをいい加減にしていれば、どこで神さまは大きな審判を、人間自身の手をもって審判を来らせたまうかわからない。神さまは審きたくない。けれども、^{そむ}叛いていれば、人間は自殺行為をいたします。人類は自殺行為をいたします。己の生命を救わんとおもう者は、「われ、われ」と言っている者は、他を排斥してとうとう戦争ということになる。

本当に愛をもって――愛とは己の生命を、己の中にあるキリストの生命をわかつことである。己を与えていくことである。キリストに化体された己を与えていくことが愛です。私たちはいくら力んだって、愛することなんか出来ません。しかしながら、キリストが入ってくれば、本当にそれをもって化体していくことができる。この愛は泉すればするほど、その愛は、その生命はいよいよ深くなる。

その全きものが来るときには、部分的不完全な異質のものがこちらの方にあると、ぐんぐん私たちは常に全きものにとらえられつつ、全きものとされつつあるんです。滑つても転んでも躓いても倒れても前進ということは、前進せしめられてある。

「われは明日も次の日も進み行かざるを得ず」

というキリストは、私たちを引っ張って行つて、

「われ先頭となり、われ^{しんがり}殿となる」

と、エホバも旧約の中で言っておられる。イスラエルの民を導くときに。



●絶語・絶慮・絶議の世界

11 われ童子わらべの時は語ることも童子のごとく、思うことも童子の如く、論ずる事も童子の如くなりしが、人と成りては童子のことを棄てたり。

この「棄てたり」も同じことです。われ童子の時は、私は童子のように語ります。また童子のように思います。また「論ずる」「ロギゾマイ」とは、ことあげすることです。語り、思い、論じた。

パウロがここである「童子わらべ」というのは何かというと、童子というのはこの福音を本当に受けない時代を童子という。福音を受けてからは「成人」という。地的な我のことを童子という。霊的天的な我のことを成人という。私たちがいわゆる知情意のはたらきをもつて、五感のはたらきをもつて、普通やっているとこの文化人、いわゆる人間のすることなすこと一切、これは即ち、

「語ることと思うこと論ずること」

です。もし少し強いていうならば、「思う」世界は哲学や学問、いろいろ思考する学問の世界といたらいいですかね——いや、そういう意味にだけにとろうというのではないですよ——ちよつとそういうことに例えていうだけのはなしです。それから、「語る」というのは、普通の実際の交際において、普通の生活において語られる世界。

「ああいうことがあつた、こういうことがあつた」

といって、起こったことを、歴史を語るような意味のことでもあるでしょう。要するに、普通の生活において語りあう世界。また、考えてものを探求していく世界です。「論ずる」、これはいろいろな実際問題を論じていくので、あるいは政治とか経済とかというようになることになるでしょう。

だから、政治、経済、学問、芸術——思う世界に芸術も入れていいでしょう——学術、また普通の実際生活、といったようなことが即ち、「語ることと思うこと論ずること」と、もし多少それを少し分析して考えてよろしいとするならば、そんなわけでしょう。要するに、私たちの文化的生活の一切を「語ることと思うこと論ずること」といった。

それがかつては童子の如くでありましたが、今度はその童子のいろいろな事態を私はすっかり片づけてしまったと、こういうわけです。信仰に入りまして、

「私たちは信仰に入つて成人の世界に入つたから、もうこの世のご連中にはいい加減でよろしい」

なんてなことではない。その中に消化されていくんですから。済んだものが、消化されたものが今度は本当に高次な立場からそれが、もちろん高次に精出されて使われていくわけです。それを乗り越えたということ。即ち、語に絶して絶語の世界に入り、それから思うこと慮に絶して絶慮の世界に入り、また絶論絶議の世界に入る。みなそれを絶して乗り越えた世界に入つて、そして今までの技術が本当に今度はそこで消化されて使われていく。



画家でもそうでしょ。やつぱり段階を踏んで、しっかりデッサンからして勉強していかなければ。

「さあ、偉大なる大作をしよう」

としたって、一足飛びに福音を受けて冥想して描こうとしたって、そうはいかん。やはり、技は修練されていなければいかん。けれども、技はあるところまでなんです。

●無限知・無限実存のキリスト

それはあの弓の話でも御存知のとおりでしょ。ドイツ人が一生懸命で弓の練習をした。なかなか分析的に考えるから、よくいくです。けれども、あるところの先は上達しない。それで、その弓の先生が

「明日の夕方、暗くなってから来なさい」

と。行ってみたら、お線香が一本、^ま的の横に立っている。見えるか見えないくらいに。もちろん、^ま的は見えない。けれども、その先生は瞑目して――その瞑目したのはいわゆる見るこの世界にですよ。いわゆる肉眼をもつて見ることに絶した世界で――霊眼の世界に入る。そして魂がすっかり澄んで自分と^ま的とが全く一つになり、自分と^ま的とが全く一つになった時に、ハッシと射たらば金的に当たる。そのドイツ人は頭を下げて

「いや、全く参った」

と。東洋人はそういう世界に入るのに、ある素質を元来いただいていたのであります。西洋の学問は大いに勉強していい。けれども、西洋の学問や西洋の文化を入れていいんですが、私たちは本来の東洋的な日本的なものをもつて、これをすっかり消化し、東西融合して渾然たる一つの全き世界に向かつていく。

ゲーテという詩人がそんな角度で動いていた。彼は実にドイツ人中のドイツ人である。しかしながら、彼ほどドイツ人離れたドイツ人はないといわれている。それは、彼はドイツ人であつて超ドイツ人なんです。本当の人というのは皆そうです。日本人で本当に日本人を越えていなくては、本当の日本というものを表すことができない。マルチン・ルター然り。偉大な人をみてみると、みんなそうなんです。みんなまぎれもなく、デンマーク人、スイス人、ドイツ人、イギリス人である。そして本当に素晴らしく突き抜けているから、これは世界人である。

日本が世界的になるというならば、その角度の突き抜けをしなくてはいかん。そのためには絶対にこの無限知の世界、無限実存のキリストを受けとらなければダメなんです。これを受けとらなければ、日本の一切のこの「思うこと語ること論ずること」の世界の限らない私たちの一切の諸々の文化現象は本当に現象していかない。そうでない華はよさそうだけれども、みんなうわつたります。本当のグルント〔基礎〕ができていない。

日本の自動車道路はダメだね。



「日本の自動車道路を見てみると、日本人の文化に対する在り方が分かる」
なんて、ブルンナー先生が言った。即ち、土台がしっかり固めてないから少し重いものが来たり、また陽が照つたりするとおかしいことになる。

どうか皆さん、本当の土台は上からやって来るんです、「隅の首石」のキリストから。そういうったような意味において、相対的なものは修練されますけれども、しかしそれは本当に今度は使われていく。そして、欠陥があるならば、それは逆に今度はそれを補うところの、成人ですから、また智慧ですから、心配はいらんです。

その努力精進の前段階から、信仰、直感、直入、体受、投身の次の世界に入ると、この成人になったら、さきのことそれがそれ自身としてとやかくということがなくなつて、もうすっかりそれが消化されたから、その意味において

「用済みとなつて」

という。用済みとなつていくけれども、それは消化されて使われていく。私は小学校や中学校の教育で受けたものが、これといって別に体験としてつかまえることができないけれども、ある何ともいえないものが残っていることを感ずる。これが大事なんです。

●光によって光を見る

12 今われらは鏡をもて見るごとく見るところ^{おぼろ}朧なり。然れど、かの時には顔^{あわ}を対せて相見ん。今わが知るところ全からず、然れど、かの時には我が知られたる如く全く知るべし。

パウロはここで、「見る」だの「知る」だの言っている。「愛する」ということはそつちのけみたいですが、ここへ来るといって、10節あたりから。

「鏡」というのは金属性のもので、それが滑らかになつて映る。コリントは非常にそれが素晴らしいもので、なかなかよく映つたそうです。その金属的な鏡を通して見るところ^{おぼろ}朧において見ているという言い方です。「アイニグマ」朧において見ている。ところが、「かの時」「トテ」には、「顔に対して顔を」見るといふ。「プロソーポン・プロス・プロソーポン」、英語でいえば「フェイス・ツウ・フェイス」で、まともに顔と顔とを見るところ。

「顔」「プロソーポン」という字はラテン語でいうと「ペルゾナ」という字で、「パーソン」「人格」です。ある人を見るとときに、その人の腕を見やしない。すぐ顔を見る。顔は即ちペルゾーン、ペルゾナでありまして、即ちその人の一切はその顔というものに表れてくる。顔はその人の人格の徴です。顔の中の目玉はその人の心を表している。心が曇っていたり、何か思うところがあると、ちよつと目ににごる。言葉よりも目や顔の方が明らかにものを言っている。

「顔と顔」ということは人格と人格が相まみえるという言い方です。素晴らしい言い方です。「かの時には」ですよ。今は、部分的に「エク・メルス」に、部分的に知っているけれども、かの時には私が知られているように知るであらうと。詩篇の36篇9節に、



「⁹そはいのちの泉はなんじに在りわれらはなんじの光によりて光をみん。」(詩篇36・9)

という言葉がある。これは非常に大事な言葉です。

「われらはなんじの光によりて光をみん」

と。私たちは太陽の光によって光を見ている。何で光を見えますか。太陽の光で光を見ている。太陽の光を受けないところの闇は見えない。物体はみんな光を放っている。反射している。だから、私たちは見える。水はどうですか。水は光を通してしまいうから見えない。この表面を見ると何かちよつと線が見えますけれども、水は光を通すので見えない。

私たちが本当に神に貫かれたら、変貌の山のキリストのようになる。キリストは光を通してしまった。神の光を通しましたならば、あの変貌の山においてキリストの本質が何であつたかということが、あそこに顕れた。あまりに神々しいので「弟子たちは」ぶつ倒れた。キリストは私たちと同じ弱さを有つて、同じ心をもつて、同じく御飯を食べていました。けれども、キリストの本質はその回りの人にも、すべての人に隠されていた。ただ、いよいよ十字架にかかろうという間際になつて、選ばれた人たちヨハネとペテロとヤコブだけがキリストと共に山に登らしめられた。彼は変貌した。そして、モーセとエリヤと語つた。これが実はキリストの本質であつた。

「十字架を突破したら、私はこのようになるよ」

というんです、キリストは。変貌のあの姿は復活の預言なんです。事実をもつてしている預言なんです。水は光を通すから見えない。そのようにキリストは光に貫かれたので、神の光に貫かれたので、弟子たちは眩くて見えない。まあ福音書の現実なんてものは、およそ註解なんかできません。平伏して本当にその前に平伏して、この現実には驚嘆驚倒する。

「聖書は驚嘆驚倒して読まるべき書なり」

と、私はこの聖書の扉に書いてある。驚嘆し驚倒しなければ読めない。

「私はひとつ聖書を分かつてやろう」

なんて、絶対に読めない。

光によって光を見るんです。私たちは福音の真理によって本当に一切の真理を見ている。ああ、仏教の本を読んでも、何を読んでも、そこに真理があれば見えてくる。その位置、その限界というものがつかめてくる。そして、それを更に幸いして、いくらでもそれを善用していくことができる。それを伸ばしていくことができる、ことおよそ偽りにあらざれば。偽りの父はサタンであります。真理に反する非真理でないものは、これは一切を包摂していきます。もし非真理があれば、それを真理に変貌させます。

「曲がりたるは直く、冷たきは温かく、暗きは光に」

とイザヤ書の中に書いてある。そのようにこの神の御霊は驚くべき救いの御霊である。神の智慧は救いの智慧である。神の光は救いの光である。光によって光を見る。



「汝らは世の光なり。私が光だよ。この光に来てごらん。そうしたば、お前たちは本当に光になれるよ。いや実に、私はお前たちの中に光を投じたではないか」

と。十字架・復活においてキリストは私たちの中に光を投じてくださったから、

「既に光だよ。だから、お前たちは世の光といよいよなりなさい。私がならせてやる」

と。これがキリストの福音なんです。

●「よしよし」

いつも私たちを救い上げながら、いつも私たちをキリストは、もし間違ったら審きながら。しかしながら、その審きは決して審き切りの審きではない。審くことが同時に救うことなんです、キリストにとつては。即ち、私たちの汚れたるは審き、審きつつそれは清さにされていく。決してただ「よしよし」というのではない。

「一切のものに雨を降らせる」

というけれども、決してただ「よしよし」と言っているのではない。「よしよし」と私は言います。けれども、「よしよし」というこの言葉の奥には、みんなそれを引き受けているキリストの「よしよし」なんです。キリストは自分で引き受けて、

「よしよし」

と言っている。だから、心配はキリストが引き受けて、自ら引き受けながら、自ら救いを与えているのがこのキリストの福音であります。いわゆる大慈大悲よりもっと深刻な「よしよし」なんです、この「よしよし」は。

あの放蕩息子を迎えたお父さんのところに、

「あそこには十字架がない」

と神学者が言います。どういたしまして。あのお父さんの心の中に十字架が読めなかったらダメです。イエス・キリストはそれを深く自分が引き受けて、「よしよし」をキリストはしてくださった。だから、私たちはこのキリストの恵みに感激して、悔改めがくるんです。方向転換がくる。人間的悔改めは、ある程度はできるでしょう。しかし、それは決して決定的なところにはいかない。キリストの恵みにぶつかるまでは、私たちは決定的な悔改めにはこない。十字架にぶつかるまでは、決定的な悔改めにこない。方向転換にこない。

「キリストの恵みが我らを悔い改めしめる」

とローマ書2章にパウロが言っている。

「4 神の仁慈^{なさいけ}なんじを悔改^{くいあらため}に導くを知らずして、その仁慈と忍耐と寛容との豊かなるを軽んずるか」(ロマ2:4)

とある。見るところおぼろであつたけれども、光によって光を見るようなことになる。そうしたらば、変貌されます。「ペルゾナ」人格と人格とが相對することになる。

「かの時」というのは、黙示録をみてください。黙示録、聖書の最後の章です。素晴らし



いものを示されたもんですね、ヨハネという人は。22章1節、

「御使また水晶のごとく透徹れる生命の水の河を我に見せたり。この河は神と羔羊との御座より出でて都の大路の真中を流る。河の左右に生命の樹ありて十二種の実を結び、その実は月毎に生じ、その樹の葉は諸国の民を医すなり。今よりのち詛わるべき者は一つもなかるべし。神と羔羊との御座は都の中にあり。その僕らは之に事え、且その御顔を見ん、その御名は彼らの額にあるべし。今よりのち夜ある事なし、燈火の光をも日の光をも要せず、主なる神かれらを照し給えばなり。彼らは世々限りなく王たるべし。」(黙示録22・1～5)

「王」という表現は、その僕らがですよ、そういつた祝福された表現をいう。

「主たる神自身が彼らを照らして、もはや日月の光を要せず」

なんという素晴らしい天界か。この光によりて光を見る。即ち、この光によりて御使の光を見る。いや実にその聖顔を見奉らんという最後の段階が出ている。

「我らは鏡を見る如く今はおぼろだけれども、されどかの時には顔を合わせて相まみえん」

という。その時には栄光のキリストに相まみえるのであります。その時には本当に人格はキリストと相まみえる世界にまともに――今は、私たちは信仰の現実だが――その時には実に顕現の現実であります。

「ああ、あの人にだいぶ会わないが、会いたいな、見たいな」

と私たちの人間的な気持もこの「見んことを欲する」ではないですか。詩篇11篇に、

「⁷エホバはただしき者にして義しきことを愛したまえばなり、直きものはそ

の聖顔をあおぎみん」(詩篇11・7)

とある。義と愛は一つです。神さまとの魂の関係がはつきり立っている者は、その聖顔を仰ぎ見んという。17篇に、

「¹⁵されどわれは義にありて聖顔をみ、目さむるとき容光をもて飽足ることを

えん」(詩篇17・15)

という素晴らしいことが書いてある。されど我は汝エホバの義にあつて、キリストの義にあつて聖顔を見、目さめる時、みかたちをもつてその光耀たる光の姿をもつて飽き足ることを得んと。

●神知・霊知・超越知・実存知・愛知

ところで、私たちがその終末的現実を見るといふ世界は、なぜ望めるか。ただ

「そんな時がくればいいな」

ではダメなんです。現にそれを見ていなければ最後の見るはこない。だから私は申し上げ



ている。終末的、現在の終末の現実をもたないものは、一切実は希望をもつことができない。希望の保証は現在にすべてきている。新天地の希望の保証はみな私たちの中に現在にきている。核として、双葉の姿で来ている。今、詩篇でもって書いてあるとおり。いや実に、

「我を見し者は父を見しなり」

といって、福音書にきたならば、私たちはキリストを見ている。確かに見ている。ただ、私たちは本当にキリストに見られている如く見てはいません。キリストが私たちを見る見方の如く、私たちはキリストを見ていない。

けれどもとにかく、キリストを見ていると、私はキリストを見さしめられました。ここで私は見させられました。この「見る」という字はみなこれは本来の――文法的ではないですよ――本当の意味においては受け身ですよ、「私は見る」といったって。

「私は福音をつかみつつある」

なんていったって、これは

「つかまされつつある」

のです。「キリストを見る」といったって、

「キリストを見させられている」

ということ。福音書にぶつかると、キリストは見させられている。その見られてある如く、いや自分はキリストに見られています、今見さしめられています、それが本当の今度「見る」という世界にくる。

「初めて見ました」

という世界にくる。

それから、今は部分的にまた不完全に知っていますけれども、そのときの「知る」という字が「ギノースコー」という字で、かの時に「知る」という字は「エピグノースコー」という字が書いてある。同じ「知る」という字がちがう。あの方方は「エピグノースコー」という。前の方はただ「ギノースコー」という。「エピ」というのは英語でいうと「アポン」というような――いろいろな意味がありますけれども――主導的な意味です。あるいは「オーバー」「上」。だから、「エピグノース」というのは超越的な知である。超越知。もうひとついえば、霊知、神知といってもいい。これはスエーデンボルグが『神智と神愛』という有名な本を書いています。神知、霊知、超越知です。

今は「ギノースコー」「知る」ところは部分的であります、かの時には、私は知られたように、本当に天的に霊的に知られているように、いよいよ真に霊的に知ることになる。

「また私が知られているような具合に従って」

という、特にそこは「カトース」という強い字が使っております。

ヤコブが天の階きざはしの夢を、石の枕に天の栄光、梯子はしごがかかって、そして天使が上り下りするのを見た。天との交通がそこに開けて、光の世界がそこに現れてきて、



「ああ、ここが神の国の天の門であることを知らなかった」

とヤコブが言った。そのように私たちの中に天の梯子がかかってきて、上り下りする。ルッターが『クリスチャンの自由』の最後のところで、

「愛はどのようにに天から下りまた天に上り、そしてまたそれが人に伝わっていく」

というような、非常にうるわしい表現をしているところがあります。

この「エピグノースコー」という字は、新約聖書にどれくらい使っているかというようなことを別にここでどうのこうのと申すことはないけれども、これは福音書にもこの字が書いてある。いちいちあげませんけれども。「ギノースコー」とほとんど似たような意味で使っているところもある。けれども、特にパウロがここで使いわけをしているのは――コロサイ書あたりにもはつきりと使いわけのしているところがあります――これは正に靈知である。超越知である。

「今私たちが知るところ」の「知る」という語は、ヘブライ語の旧約の世界でもなかなか大事な語でありまして、ヘブライ人が「知る」というときには、私たちいわゆる文化人のギリシア的な知とはちがうんです、この「知」というのは。これはヘブライ人にとっては「知る」ということは実存知なんです。旧約聖書で「知る」ということが非常に強く出ているのは詩篇139篇、

「神さまは一切私たちを知りたもう」

ということを実にたたみかけて書いてある。

「⁴そはわが舌に一言ありとも観よエホバよなんじことごとく知たもう」(詩篇

139・4)

と書いてある。神さまに隠されたるものは一つもないと。もし神さまが審きをもつてただ知りたもうなら、誰か耐え得んや。それは詩篇の中にも、

「誰か聖前に耐え得んや」

という言葉もある。けれども、神さまの知は、最も深い意味において愛知である。愛をもつて知る。愛の認識です。愛知です。愛の認識をもつてキリストは知りたもう。

このことは旧約聖書の預言者の中で一番はつきり言っているのはホセア書です。ホセア書は、いかに悲惨な悲劇的な家庭生活を通して、神さまの愛を知らしめられたか。その神さまの愛を、贖いの愛を知らしめられたホセアは、ホセア書は神の愛を本当に伝えた旧約の一番深刻な文字です。キリストの愛を、ホセアは自分の生涯をもつて預言した。イスラエルは背ける民である。もう北イスラエルの国はその不信不義のために滅びる。ホセアは北イスラエルの最後の預言者です。ホセアが預言したあと幾ばくもなくして、イスラエルの国は紀元前721年にアッシリヤに滅ぼされる。サマリヤの陥落です。

ホセア書を通して神の愛知が何ものであるかを少し学びたい。ホセア書第3章、

「エホバわれに言い給いけるは汝ふたたび往きてエホバに愛せらるれども転かえ



りてほかのもろもろの神にむかい葡萄の菓子を愛するイスラエルの子孫のごとく、そのつれそうものに愛せらるれども、

夫に愛せらるれども、

姦淫をおこなう婦人おんなをあいせよ。

神さまに愛せられているイスラエルだけれども、そいつが横にそれてしまつて、偶像を崇拜しているイスラエルの民。しかし私はこれを棄てない。私はイスラエルを深く愛しこれを知っている。だから、お前もそのお前から背いているところのみだらな妻を、私がこのイスラエルを愛しているように、愛しなさいと。

²われ銀十五枚おおむぎ一ホメル半をもてわが為にその婦人をえたり。

昔はそうにして、自分の妻が奴隷的に売られているから、やはり奴隷的な方法で買つてくるよりか仕方がない。

³我これにいいけるは汝おおくの日わがためにとどまりて淫行をなすことな
く他の人にゆくことなかれ、我もまた汝にむかいて然せん。」(ホセア3・1～3)

「我もまた汝にむかいて然せん」

という言葉に驚いたのであります。

「お前は間違つたことをした。今度はここに居なさい。他のところにさ迷い歩くん
じゃないよ。私もそういうようにするからね」

と。ホセアは何も妻に対して悪いことをしたわけではない。けれどもこのホセアは、

「私もそういうようにお前のところに居るよ」

という。彼は妻の心となつて、どん底の心となつて、

「自分もそうするからね」

といつて相手を慰めている。審いていない。これがキリストの愛なんです。キリストの愛の実存的預言なんです。キリストはそうようにして、私たちを愛し、本当に知っている。

● 知り定め召し義とし光栄とする

ローマ書8章29節のところに、

「²⁹神は預あらかじめ知みこりたもう者を御子の像かたちに象らせんと預じめ定め給えり。これ多ちやくしくの兄弟のうちに、御子を嫡子ちやくしたらせんが為なり。³⁰又その預じめ定めたる者を召し、召したる者を義とし、義としたる者には光栄を得させ給う。」(ロマ8・29～30)

という。神さまは、

「知り、定め、召し、義とし、光栄とする」

という、五段階を通して私たちを選んでいくくださる。選んでいらつしやるのは、私たち



が偉いからではない。私たちが何か望みがあるからではない。

価値あるものを愛するのはエロースであります。美わしきものを愛するのはエロースです。対象にひかれて愛するのはエロースという。けれども、神さまは、このイスラエルは頑^{かた}な民である。小きき民である。一番やっかいな、頑^{かた}なイスラエルの民、傲慢にして強直な^が私の強い民をつかまえて、そして人類に救いをもたらそうという。一番やっかいな民をつかまえて、神さまは人類の救いの道をひらいた。これは摂理なんです。

だから今でも一生懸命でユダヤ人は頑なに頑強に十字架を否定してキリストを信じない。

「あれはメシヤでない」

といって十字架を否定している。パウロがサウロであったときにキリストを否定した。けれども、その頑固なサウロがとうとう引っくり返されて、

「ああ自分とはんでもない間違いをした」

と、180度の方向転換、メタノイア、悔改^{かいがい}、悔改めを起こしまして、パウロは本当にキリストの僕となった。キリストは、神さまはパウロを知っている。パウロはキリストをちつとも知らなかった。けれども、キリストはパウロを知って、

「お前はすごいぶん頑固だね。だけれども今度は、お前を本当に使う。その我^がを棄てなければダメだ。砕けなければダメだよ。私のこの砕けで砕けなさい」

というのが、キリストのパウロに迫ってきたところの恵みである。イエス・キリストはパウロを知り、定め、これを選び、これを義とし、これを栄光に変えた。だから、パウロは自分の体験をここにローマ書8章で告白しました。

一番ダメなマイナスな者。私たちはみんな罪びとです。罪びとのどうにもならないことを神さまはよく知っていていらつしやる。罪びとのどうにもならないこの者をよく知ってください、それを極みまで愛して、これを変質変貌させようというのが神さまの救いです。

「私は生まれつきこうであります」

なんてことはひとつもない。もし福音が何か例外者をもうけるものならば、それは福音ではない。神さまの福音は、救いの世界は絶対に例外はない。万人が救済されるところの道はひらいてある。ただこれを受けないで、聖霊に逆らって、逆らい通すならば、

「聖霊に逆らう罪だけはゆるされない」

とキリストは言われた。私たちは間違ったり、いろいろなことをして、

「ああわるかった」

と帰ってくるならいいけれども、聖霊に抵抗している悪霊的な傲慢な霊をもって聖霊に抵抗するならば、それはゆるされない。しかしながら、それであってもなお妬むほどに愛し給うというので、神さまは、キリストは最後までどんな人をも決して例外なしに待ち望んでおられる。そして、愛する。それが本当の「知る」という、愛知であります。その本質をよく知りながら、本当にその本質を知るがゆえに、そのどうにもならない本質を変えて



しまうというのが、この愛知というもの。私たちがこの知にぶつかって、この愛にぶつかって、愛即知というエピグノーシスにぶつかって、驚くのであります。

●実存することによってのみ福音は知られる

たとえば、コロサイ書1章9節、

「9この故に我らこの事を聞きし日より、汝等のために絶えず祈りかつ求むるは、汝ら霊のもろもろの知恵と穎悟とをもて神の御意を具に知り、¹⁰凡てのこと主を悦ばせんが為に、その御意に従いて歩み、凡ての善き業によりて果を結び、いよいよ神を知り、」(コロサイ1:9～10)

と書いてある。ここに「知り」と書いて、それから

「御意に従いて歩み、凡ての善き業によりて果を結び、いよいよ神を知り」

とある。福音はいかにして知るか。即ち、福音は福音することによって、実存することによってのみ、福音は知られる。私たちは、研究によって福音は知られない。研究もひとつの手段ではありません。けれども、研究が首位をしめるような聖書研究をやったって、いつまでたつてもダメなんです。本は読みなさい、読みなさい。歩きながら読みなさい。私たちは歩きながら、実存しながら読みなさい。それが本当の読み方です。さっき言ったキリストの光によって読むんです。電気の光じゃない。単なる太陽の光でもない。

「その時には日月の光を要せず」

という、このキリストの光をもって私たちが、太陽の光の中に浸透しているところのキリストの光をもって読まなければダメです。

そうしたらば、「いよいよ神を知り」と書いてある。この「知る」という字が「エピグノーシス」という字です。この「知」というものがいかに信仰と連関しているかということです。たとえばローマ書3章20節、

「²⁰律法の行為によりては、一人だに神のまえに義とせられず、律法によりて

罪は知らるるなり。」(ロマ3:20)

律法との関係ですね。律法によって罪が知られる。また、エペソ書1章17節には、

「¹⁷我らの主イエス・キリストの神、栄光の父、なんじらに智慧と默示との霊を与えて、神を知らしめ、

この「智慧と默示との霊を与えて、神を知らしめる」という、これが正に靈知の非常にはつきりしたところの箇所です。これはスエーデンボルグあたりが非常にこの世界を深く知らしめられた一人であります。

栄光の父、なんじらに智慧と默示との霊を与えて、神を知らしめ、¹⁸汝らの心の眼を明かにし、神の召にかかわる望と、聖徒にある神の嗣業の栄光の富と、¹⁹神の大能の勢威の活動によりて信ずる我らに対する能力の極めて大なると



を知らしめ給わんことを願う。」(エペソ1:17、19)

いかに全的に――いわゆる頭で知るのではない――「知る」という事態が、なんとパウロの言葉は重厚な言葉かと思つて驚く。頭から出てこないです、こんなのは。愛知でありまして、また信仰や望みや愛と、この知というものがいかに密接であるかというようなことは、パウロの書簡をよく調べてみれば、自ずからうなずかれるところです。ここで特に「エピグノーシス」「超知」を愛の讃歌の中でもつて言わざるをえないのは、

「神に知られたる如く知る」

という、私たちが神に知られている――その愛知がどのような姿であるかをさつき一つの例としてホセア書で申し上げましたが――キリストが私たちを尋ね給う、知り給うということをもつて、それが本当に今度はさつきの

「見られたる如く見る、知られたる如く知る」

という世界にくるわけです。

「如く」という言葉はただ「ように」というのではこの場合はもちろんない。単なる「ように」というと、何か真似ごとみたいですが。「如く」というのは、質が同じ同質性である。また、その同質性ということの中には、そこに深く交わりが来なければいけない。交わりをもっている。「の如く」のためには、どうしても交わりがなければ、知られない。私たちはこうやつてお互いに――「あの人」といつて遠くで考えると、とんでもない誤解をするけれども――近くにあつて一緒に生活して、一緒に集会をしたり生活していると、本当にそれは互いを知る。交わりの世界で知る。

神さまが私たちを知るのは、観察して知っているのではない。キリストは私たちを観察して知っているのではない。私たちは観察して知られたんではやりきれない。キリストは私たちと深く交わつて、知つてくださる。誰が知らなくても主イエス・キリストは知りたもう、ということとは、キリストはただ傍観して見ているのではなくて、貫いてその中に本当に入つて、私たちの中に本当に入つてくださるのが、キリストのこの「知る」です。

だから、共に喜び、共にそれに悩んで下さる。昨日言つた、その「シンパテオー」「シンカリオー」という字です。

「共に喜びそして共に思いやること深き」

というヘブル書の言葉がそれなんです。それはみんな本当に知るからこそ思いやり、本当に知るからこそ喜んで下さる。これは交わりがあるからこそ知るのであつて、交わりのない知り方は、これはパリサイになります。ヘブル書4章15節、

「¹⁵我らの大祭司は我らの弱を思い遣ること能わぬ者にあらず、罪を外にして

凡ての事、われらと等しく試みられ給えり。」(ヘブル4:15)

「²彼は自らも弱に纏わるるが故に、無知なるもの、迷える者を思い遣ることを得るなり。」(ヘブル5:2)



これが交わりの「知る」です。

●悲願・霊願・本願

「共に」という字にもうひとつ「共に証する^{あかし}」という言葉がありまして、「シンマルトウイヤ」という字がある。「聖霊が共に証する」という言葉がローマ書8章16節にある。

「¹⁶御霊みずから我らの霊とともに我らが神の子たることを証す^{あかし}。」(ロマ

8・16)

「我らの霊とともに証す」るんです。これは御霊が交わってくださって、証してくださる。さて、「我ら知られたる如く知る」という。名の如く知られるんです。名の如く。

「我は知られたる如く我も知るべし」

と。今、ある意味において申しましたが、もうひとつある。私たちが「知られたる如く」というその内容は、私たちは神の子として。神の子として、ということ。

「神の似姿に創られた」

と創世記1章27節に書いてある。私たちはもと神の似姿です。神さまの影像です。ところが、神の影像がとんでもないものになっちゃった。けれども、神さまはその元を知りたもう。どんなにそれがダメであっても。

あのヨブがもう見るからに惨憺たる様子である。もうヨブとも分からないような。友人たちがやってくると、「お前はいったいヨブかね」というような始末です。けれども、

「ヨブは義しくして全^{ただ}し^{まった}」

と一番先に書いてある。それはヨブの本質を神さまは知りたもう。

私たちはどんなに脱落存在でありまして、神の子として創られた。このパラダイスはロストされてしまった。私たちが悪いサタンに誘^{いざな}われて、パラダイスロス(樂園喪失)になっちゃった。ところが、パラダイスは失いましたけれども、パラダイスリゲインド(樂園回復)、これを回復してくださったのはキリストです。即ち言い換えるならば、私たちはもと神の似姿のパラダイスの存在であつたものを失いましたが、この神の似姿を再び返してくださいだったのでキリストのパラダイスリゲインドなんです。

私たちをその元において知り給うがゆえに、アルファをオメガにまでもつていこうというのが、神さまの悲願・霊願である、ご本願である。だから、私たちを「知る」という内容は、神の子として知っている。神の子として知って、今度は本当にキリストに在る、神の子として私たちを知ってくださる。神の似姿として。

●愛知一如

私たちはその知られたる如くならなければ、神さまを知ることができない。その日には私たちは「知られたる如く」というのは、知られたる者となって、知るのであります。知



られた者とならしめられて、知るのです。かの終末の日には、私たちは知られたる者とならせられまして、本当に顔と顔と相まみえて、キリストの栄光が化体されまして、知る。それは私たちがキリストの御霊を受けた時に、そのかたは私たちの現実を――私がどんなにマイナス99でもたった1つのプラスをキリストが、神さまが見てくださった――そこにおいて知っていてくださる。その知られたる如く、私たちはマイナス99がすっかりすっ飛んで、知られたる現実となつて、今度は神さまと本当に相まみえるというのが、我々人生の最後の目的である。

私たちは人を見るのにそのようにして、その人は神の子であるとみる。

「いと小さき一人をあなどる者は、挽^ひき白^{うす}を首に引っかけて海の中に投ぜられ
た方がよい」

なんてキリストは恐ろしい言葉を発します。その小さき皆がいい加減に取り扱うような、
「小さき弱き無きが如き存在を、天使は守っているぞ、神さまは見ているぞ、これ

を侮る者は」

と言つてのことです。私たちは、人との交わりにおいて、本当にその人におけるところの神の姿を信じ、信仰の目をもつて見ていく。愛の目をもつて見ていく。そうすれば、その人の中に信仰が形成され、見られたるものがそこに結晶される。

人を信ずる、信じぬく。

「おおよそこと信じ」

とは、そのようにして本当に信じぬくときに、相手は救われていく。それが即ち本当の祈りでもある。そうしたらば、人生これより楽しいことはなし。人生これよりうれしく、力あることはないのです。天下無敵であるという。敵はない。相手がどんなに私を敵してもいい。けれども、私は、相手に敵はない。

「敵を愛せよ」

と言つたキリストの言葉は今こそ受けとられる。神さまは私たちこの敵みたいなやつをどんな底から信じ貫いて愛してくださっている。知り、その本質の神の似姿を見て、私たちを救いあげている知り方である。どんな人の中にも、それがサタンに囚われても、そいつをキリストへもつていかずんばやまずという知り方です。

そのためには、「きみ、ダメじゃないか」といつて怒ることも愛であります。本当にそれが貫いているならば、その交わりは火が発しても、しかし、本当にその友人の真実にうたれるはずです。

そういうような知り方、愛し方、愛するも知るも正に愛知一如であります。このようにして私たち罪びとを知っていてくださる、この「知られたる如く」、キリストにされまして、本当に知るとなる。知られたる如くされつつ知るのであります。

ああ、そこでコリント前書13章の12節までできましたかね。あとただ1節を残してあとの



集会にいたします。では。

(参考)『聖意体現——主の祈り——』の巻末の註より。

(註1)「終末」。端的に申せば、私たちはいつでも「終末」に面している。質的には我らの罪性のゆえに死という終末に面して一日一日を暮らしている。「罪の価は死なり」とパウロが言ったように、この「死」の終末は審判性をもっている。しかもそれは歴史的にも真実で、我らは世界の歴史がいつその様な、神の大審判、最後の審判につきあたるか知れない。歴史というものも、この終末の総決算なくして意味をなさない。歴史的とはこの終末という究極を目ざしているという意味を土台とする。それ故に、歴史はかかる終末に直面して進みつつあること、あだかも個人の生涯において死に直面しつつ歩いているのに類似する。それ故に、歴史的現実というものは同時に根源的には、終末的現実として自覚されねばならない。

そして、罪性の質的終末性を負う信仰者は、しかし、キリストの十字架でその贖罪の恩恵によって終末性をつきぬけた。キリストの永遠の生命(義の実質)により永遠性がこれに勝った。かくて今や終末性は我らの肉体の死にもかかわらず、我らをおびやかさなくなった。その反対に、終末性はかえって恩恵の性格を以て受けとれるに至った。即ち、我らの死にも拘わらず、世界の歴史の審判にも拘わらず、キリストの恩恵を受けた者には、永生の歓喜と新天地の大希望が、終末のゆえにこそ転回してくるからである。終末的実存としての我は、キリストの十字架の死と共にすでに終末をもち、もつことによってのり越えて実存するという我なのである。

「常にイエスの死を我らの身に負う。これイエスの生命の我らの身にあらわれん為なり。」(コリント後4・10)

が終末的実存の相である。そして、それは同時に歴史の終末に於ける偉大なる神の国とその栄光を待ちのぞんでいるという偉大な終末への実存なのである。

「汝らは死にたる者にしてその生命はキリストとともに神の中に隠れ在ればなり。我らの生命なるキリストの現われ給うとき、汝らもこれとともに栄光のうちに現われん。」(コロサイ3:3~4)

とある通りである。このような終末的な現実と未来の中に在ることが終末的という事態である。そして、このような事態の思惟と解明が終末論であるわけである。

(註2)・・実存。この語の哲学的な意義の解説は、ここになすいとまをもたないが、ただ「実存」の語を著者がどのような心持、意味あいで用いているかと申せば、「実存」即ち *existentia* (エクステンチア)、*Existenz* (エクズイステンツ) は *ex* (エクス)-*sistere* (システレ)「外に現われる」の意義の語から来ているように、観念でなく、意志的な生き



た実態である。著者は我々の在り方のすがたが、その様な意志的動態であるのが、人格的存在の生きた在り方として本当たと思つたので、実存という語をずっと以前から好んで用いて来た。

そのような「在り方」や「考え方」の創始者は哲学史上のいかなる者よりも古く正にヤハウエーの神において発見する。かなり以前のこと、私は出エジプト記第3章を繙いた時、そこにモーセに自現し給うた神がいかに驚くべき実存の神として自らを現わし、かつ告白して居られるかに会って、驚異した。エジプトに於ける「わが民」イスラエルの苦患を顧みる神ヤハウエーは、「われ降りて彼らをエジプトの手より救い出だし」と言い給い自ら下に投じ出でる(sub-jecto(イェクトー))神である。そして、「我は在りて在る者」と告白し給う神である。これよりも端的な実存の解明はない。人間の実存は「死への実存」として絶望的である。それでもなお苦闘するところに人間の実存の救わるべき契機がある。神の側からの実存は生の実存である。この神の実存によって「死への実存」は生への実存に救いあげられる。その間の消息について哲学的に宗教的に苦闘したのがキエルケゴールであった。イエスは、実存者中の実存者であつて、イエスにおいて初めて真の実存が実証された。

「我は復活なり、生命なり。我を信する者は死ぬとも生きん。およそ生きて我を信する者は、永遠に死なざるべし。」(ヨハネ11・25～26)

神がイエスにおいて自現したことが、歴史を破り、歴史を創造してゆく最も烈しい実存としての神の「外への現われ」であつた。だからイエスは、

「我を見し者は父を見しなり」(ヨハネ14・9)

と言われた。受肉とは実にこの実存の実態をいふのである。

その様に基督者がキリストの生命を身証することを、神の栄光をこの土の器にあらず様に生きかつ行ずることを基督者の実存というのである。そのためには、基督者自身がキリストを受肉しなければダメなのである。キリストを受肉するとは何か。キリストを葡萄の樹とし、おのれがそのつらなりにおける枝となることである(ヨハネ伝第15章)。それはいかにして可能であるか。聖霊の人となることによつてのみ。聖霊を受けることによつて、我らはキリストの身証者(証人)となる。そのことが私の申す実存者の実態である。パウロがあれば繰り返し述べた「キリストの中に」在ることによつて、キリストの生命が「外に現われる」人となる。かかる基督者が真の実存者となる所以である。実存とはこの他のことではない。私が実存するのではない。キリストの生命が実存せしめ給ふのである。拙誌「曠野の愛」の諸論説を参照されたい。

